〈書　評〉

鷲田清一監修、本間直樹・中岡成文編『ドキュメント臨床哲学』

大阪大学出版会、二〇一〇年

奥田太郎

本書を一言で総括するなら、「これまでとこれからの「臨床哲学」の話をしよう」ということになるだろう。臨床哲学なるものがこれまで何をやってきたのか、それを牽引してきた者が現在何を思い、これから何をすべきだと考えているのか。こうしたことが、本書一冊を通読することによってだいたい把握できる。そして、臨床哲学がたどってきた道のりの紆余曲折を体現するかの如く、本書中には雑多な文体やスタイルが入り混じっており、読者の関心に応じて引き込まれる箇所がそれぞれ違ってくると思われる。それゆえに、本書を読んでいると、あたかも、自分自身のもつ哲学的関心がどこにあるかを試されているかのような気分にもなる。それほどに本書のもつ内容の振幅は大きい。また、本書のような伝統的な意味での学術書ではない著作への書評が倫理学の学会誌に掲載されることそれ自体が、時代の潮流を感じさせて興味深い。臨床哲学のムーブメントが立ち上がってから今日に至るまでの十余年の間に、哲学や倫理学を取り巻く日本の状況やムードが大きく変わってきた（あるいは、そうした状況やムードを変えてきた）と言えるのかもしれない。第一回「臨床哲学研究会」が開催された一九九五年（五頁）とほとんど同じ頃に、応用倫理学にも本格的に取り組む某倫理学研究室に学部生として入門した者として、本書の概略を紹介したうえで、いくつかの点についてコメントしていきたい。

本書の構成

本書は、「第一部　動き出す」、「第二部　動きを／動きながら」、「第三部　どこに向かって」という三つの部から構成されている。おおまかに言えば、第一部は、臨床哲学の「これまで」について回顧するドキュメンタリであり、第二部は、一種の哲学的エッセイ、第三部は、臨床哲学の「これから」について展望するマニュフェストを含んだ鼎談である。

臨床哲学の「これまで」を語る第一部では、経緯の説明、実践例の紹介、書かれたものからの取り組みの再構成が行われている。経緯の説明と実践例の紹介に際しては、重要な出来事に関して、関連する人物へのインタビューが「証言」として挟み込まれる、という凝った構成がとられている。

経緯の説明では、臨床哲学研究会から大阪大学大学院臨床哲学教室開設にいたるまでの流れ、さらに、大学の講座としての臨床哲学を象徴する「金曜6限」授業の様子が記述され、その中で起こった「臨床哲学的出来事」（四頁）である「「ロボット」発言事件」について詳しく語られている。この「事件」、すなわち、哲学者と看護師とが一定程度フラットな場で真剣に語り合ったときに生じた「きしみ」の経験は、臨床哲学に携わる人たちにとって、一種の原体験あるいは原風景として重要な意味をもっていることが随所に窺われ、この「事件」について述べられた箇所は本書の柱の一つであると思われる。この「事件」について中岡成文は次のように述べている。

「ベッドに横たわっているのはロボットかもしれない」という堀江剛さん（当時大学院生）の指摘が、たまたまそこに居合わせた看護関係者の強い反発を招き、臨床哲学というものに対する不信感を起こさせたことは、哲学としての臨床哲学を考えるうえでも、看護関係者と接触し看護実践の性格について語るうえでも、繰り返し私の帰る原点となっている（四頁）。

本書のもう一つの柱は、書かれたものから臨床哲学の取り組みを再構成した本間直樹による論稿である。臨床哲学教室がこれまでに発行してきた『臨床哲学ニューズレター』、『臨床哲学』、『臨床哲学のメチエ』に記されたさまざまな書かれた言説を繙きながら、臨床哲学が取り組んできたことについて細部にわたって語られている。私たちはこれを読むことで、臨床哲学にかかわる人たちが、まったく先の見えない前例のない状態から手探りで動き続け、そうした動き全体が徐々に、そして遡及的に、おぼろげな臨床哲学としての輪郭を取り始める様子を追体験することができる。そこに記されているのは、たとえば、哲学の本格的な共著論文を作成するという挑戦の足跡であり、看護、学校教育、セクシュアリティなどについて、自分自身のフィールドをもち徒手空拳で哲学する試みの痕跡であり、また、哲学カウンセリング、ネオ・ソクラティックダイアローグ、子どもの哲学、哲学カフェといった対話活動の軌跡である。

さて、第二部では、中岡、本間、紀平知樹が、それぞれ臨床哲学に関する哲学的エッセイを書き記し、そこでは、三者三様の切り口と文体によって、臨床哲学なるものが語られている。印象的なのは、多様な様相を見せながらもこの三者が共通してあることに言及している点である。それは、考えることと動くこととの同期を目指すという基本姿勢である。この基本姿勢は、

第二部のみならず、本書全体を通じて陰に陽に示されており、「ひとりひとりがかかわる臨床の数だけ、《臨床哲学》があってかまわない」（五二頁）とされながらも、それが、複数の多様な同時多発的試みを「臨床哲学」として束ねる一つの道標となってきたことが窺われる。

最後に第三部では、大阪大学の臨床哲学教室の立ち上げ時期から深く関わってきた中岡、本間と、いわば新規参入者として現在臨床哲学教室で指導教員の立場にある浜渦辰二との間で交わされた、教育手法を含めた講座や組織の運営に関する鼎談が掲載されている。教育方法論、組織運営論、残された課題等について、それぞれが思い思いのことを語っており、（やや放談気味に）臨床哲学の「これから」が展望されている。

以上の通り、臨床哲学が辿ってきた道を確認したい読者は第一部を、哲学的な思考のありようについて興味をもつ読者は第二部を、伝統的な哲学研究のスタイルを逸脱した哲学の方法論やそれに即応する教育方法論等について関心のある読者は第三部を読むことで、十余年の実践経験に裏づけられた重みをもつ言葉を介して、それぞれに何らかの示唆を得られるだろう。

評者によるコメント

本書の内容は、特に特定の筋道に沿って展開されているわけではないので、評者が本書を読み進めるなかで気になった点について、系統立てずに述べていくことにする。

（1）時代の証言として

本書は、哲学に取り組む者を取り巻く時代の空気が変化して、この十年でずいぶん風通しがよくなったことに改めて気づかせてくれる。思いつく限りでも、金沢工業大学の科学技術応用倫理研究所（一九九七年設立）、東京大学の生命・医療倫理教育研究センター（二〇〇三年設立）、北海道大学の応用倫理研究教育センター（二〇〇六年設立）等、研究と教育の両面にわたって社会に開かれた哲学を本格的に試みることを明示する大学内の部局が開設されてきているし、「カフェシアンティフィーク」のような科学喫茶、科学酒場が運営される等、これまで大学の中で行われてきた学的営みの場を街場に広げていく試みもそれぞれの地域でこつこつと実施されてきている。そうした動きを「異端」として軽々に切り捨てることが躊躇されるようになって、そのうえで、それに積極的に反応する者もあえて反応しない者もいる、という現状は、「ずいぶん風通しがよくなった」と言ってよいように思われる。換言すれば、哲学の存在証明が何らかの仕方で求められる時代にあって、誰もが、権威にあぐらをかいたまま無批判に研究を遂行することができなくなった、ということになるだろう。臨床哲学のムーブメントは、文字通り体を張った哲学の存在証明の試みであり、本書で描き出されている臨床哲学教室の取り組みの数々を受容する土壌が、この

十余年のうちに、かなりの程度醸成されてきたと言えるのかもしれない。「大学の外へ」という発想は、今やまったく自然な仕方で各大学の生き残り戦略のなかに組み込まれている。それをかなり早い段階で、相当にラディカルな仕方で追求し、今もなお追求し続けている大阪大学の臨床哲学教室の取り組みをまとまった形で読むことができることは、日本の大学において哲学が営まれるその文脈を考えるうえできわめて重要である。

(2) 蓄積の凄み

本書を読んで最も印象に残ったのは、雨垂れ石を穿つ如く、一つ一つの試みの重厚なまでの蓄積の凄みである。本書評でもこの後、批判的なコメントを付すことにはなるのだが、どれほど批判を重ねようとも揺るがせられないであろう十余年の重みが本書からは感じられる。しかし、そうであるからこそ、皮肉にも、本書で語られたことはおそらく、十余年の臨床哲学の実際の営みの内実をほとんど伝えられていない、とも言えるだろう。より深いところに響く経験は、語られた瞬間に何か陳腐でありふれた体験談のように感じられてしまいがちだからである。外部の読者が本書を読むとき、そこに記された苦闘の歴史を知ることはできるが、臨床哲学の当事者たちがさまざまな試みの中で自らの哲学的センスのうちに蓄積させてきた何かを知ることはできない。それはおそらく、臨床哲学の試みに参与してきた哲学者たちによる彼ら自身の思考としてしか知られえないだろう。そうしたアウトプットが、今後次々と世に問われることになるのを期待せずにはいられない。

(3) 対話活動の射程

臨床哲学として精力的に取り組まれている対話活動では、さまざまなトピックが扱われてきたことが、本書からも窺われる。とはいえ、ネオ・ソクラティックダイアローグ、子どもの哲学、哲学カフェなどの取り組みは、一見すると多種多様なテーマについて融通無碍な語りが行われる場であるように思われるが、注意深く見ると、全体としてそれは、「哲学」のために行うという一種のわきまえをもって営まれていることに気づかされる。そのことは、以下のような記述をはじめ、随所に看て取ることができる。

> 「いろんな人の考えや意見を知ることができた」、「もっと議論を深く掘り下げたい」などの感想が参加者から必ずといっていいほど出される。哲学へのイニシエーションはこれだけで十分だと私は思う。私たちは、無から考え始めるのでなく、人の考えを知ることから自分で考え始め、もっと深く考えたいと希求するようになるのだ。そもそも自分が話す言葉自体も人から教えられた他者の言葉なのだから（一〇九頁）。

もちろん、哲学カフェにおける議論が十分に哲学的である

ためには、哲学思想を学ぶことによって身につけられるであろう粘り強い思考力や問いを彫琢する能力を進行役が有していることは不可欠である（一二八頁）。

「哲学」の看板を掲げる以上、あくまでも「哲学的であること」を指向するものであることを貫こうとするのは当然ではある。哲学の営みを社会へと開いていく臨床哲学の試みとしては、ひとまずそれで何の問題もない。しかし、その試みが一定の成熟を迎え始めたとき、本当の意味で哲学の「外部」へと引き出されるような要請に直面するかもしれない。たとえば、哲学カフェなどを通じて経験される議論の「ずれ」について、本書では次のように語られている。

誰かが議論のなかで「ずれ」を発見することは、紛れもなくその人がそこに参加していたことの結果にほかならない。齟齬や不一致は時間をかけてこそ発見される。それは徒労では決してなく、その場に集う人のみが追求できる創造的な営みなのだ（一一五頁）。

こうした議論の「ずれ」や齟齬、不一致の捉え方は、それ自体として哲学的示唆に富んだ洞察であり、この洞察が、実際の対話活動のなかで醸されるように得られていることが重要である。それはよい。しかし、こうした「ずれ」の捉え方はあくまでも哲学的であろうとする者の余裕のある姿勢であって、現代社会のなかで否応なく生じる「ずれ」に苦しめられている多くの人びとにとっては、研究室で独り哲学書を片手にコミュニケーションの「ずれ」について考察している者の悠長さとそれほど変わらないものに見えるかもしれない。対話活動を重視し、そこから生まれる「ずれ」に創造的な営みとしての価値を認めることは、「ずれ」ゆえに混迷を極めるさまざまな問題とどのように接点をもちうるのだろうか。たとえば、裁判員裁判、米軍基地移設問題、派遣切り問題、高レベル放射性廃棄物処分問題など、政治性を帯びた喫緊の問題群では、当事者たちを悩ませる「ずれ」が無数にその裂け目を晒していると思われる。こうした、個人と集団と権力とが複雑に絡み合った問題に対して臨床哲学は今後、どのようなスタンスをとりつつかかわっていく用意があるのだろうか。次の一節は、臨床哲学としての政治的なものに対する立ち位置を間接的に告げているようにも思われる。

哲学カフェは、知識の伝授、問題解決、合意形成を目的とした活動、すなわち対話することの外にある他の何かのためになされるのではなく、ただそこで話されては消滅してゆく思考の〈学びの場〉となり得る。そこは他の活動に従属しない、考えたい人にとっての自律的な場であることによってはじめて、他の社会活動と連動する思考のネットワークの一結節点となるだろう（一一〇頁）。

確かに、政治的なもの、合意形成や問題解決を目的とした「他の社会活動」から距離を置きつつ、そこへと繋がる道をさぐることは、ある意味では賢明な選択であると言えよう。しかし、それは、哲学の内部に対しては「外へ」と言いながら、社会においては広義の「哲学」の内部にとどまることになるのではないだろうか。そして、それは、臨床哲学が打破しようとする「思考に淫すること、すなわち思考することの自己充足性」（六四頁）を図らずも偽装した形で温存することになりはしないだろうか。

本書を刊行することで次の活動フェイズへの宣言が為されたと言ってよいのであれば、今後は、臨床哲学が社会に対しても批判力のありかをより自覚的に探っていく必要があるだろう。ソクラテスの名を引き合いに出すのであれば、臨床哲学のイロニーとはどのようなものかについても真剣に考察してみるべきではないだろうか。

（4）哲学であることへのこだわり

本書に度々登場する小林傳司がかつて、「自分のやっていることが哲学だと思われなくてもいいし、何なら別に哲学でなくてもいい」といった趣旨の発言をしていたのを聴いたことがある。評者はそれを聴いたときに、哲学的な思考を時に使いながらも、大学講座の論理でジャンル分けできない新しいスタイルの知的活動を遂行しているのだという矜持と潔さを感じて、そこに哲学的な姿勢の真髄があるような気がした（勘違いだったかもしれないが）。それに比べると、臨床哲学の人々（とりわけ鷲田、中岡、本間）には、自らの営みが哲学であるということに対する強いこだわりがあるように思われる。というのも、彼らが哲学と言うときに引き合いに出すのは、意外にも、過去の哲学者や思想家たちの言葉であり、また、それらの言葉に対して厚い信頼が寄せられているような印象すら覚えるからである。たとえば、本間が自身のかかわった共著論文について述べた次の一節がある。

> 「できる」と思われている（あるいは思われてきた）ことは一体どういうことなのかと驚いて問い直し、躓きに出会ってはじめて立ち現れてくるものに目を凝らす。……生理学や心理学の知識に目を惑わされ、決してよいメルロ＝ポンティ読者ではなかった私が『知覚の現象学』の読み方をはじめて学んだのは、彼女との対話を通してであるといっても過言ではない（六三頁）。

意地悪く解釈すれば、『知覚の現象学』が聖書であり、学術的な解釈論争に明け暮れていた聖職者が、「宣教活動」の実践を通じて本当の読み方を知った、といった類いの事態が述べられているようにも見える。もちろん、そうした経験は哲学をするうえで重要ではあろう。しかし、哲学の「他者」とともに思考した結果が、哲学書のより適切な解釈にとどまるのであれば、

臨床哲学のスケールは小さなものになってしまうのではないか。むしろここで求められる成果とは、メルロ＝ポンティの洞察には不十分なものがあった、というような、思弁によって紡がれた従来のすべての哲学を超えていくようなものではないだろうか。そうでなければ、結局、新しい古典の解釈方法を開発しただけだということになる。

たとえば、応用倫理学では、具体的な問題に関わることで一般的規範の内容を更新する「規範形成的応用」が試みられており、そこでは、過去の哲学者の言葉や思想は時に根拠として引き合いに出されはするが、常に批判にさらされ改訂され乗り越えられるものとして位置づけられている。一般的なイメージに反して、応用倫理学の「応用」とはそのような営みである。見方によっては、皮肉にも、「応用」を強く戒める臨床哲学の方が、哲学の古典に対してより「応用」的な態度をとってしまっているのではないだろうか。

(5) 何者として現場に立つか

紀平が述べている次の指摘は、臨床哲学の門外漢である評者にも共感できる。

> 問題や事象としての興味深さはおいておくとして、看護ケアという問題は、ひとり暮らしをしていて、特に誰の看護をしているわけでもない私にとっては、あまりにもよそよそしい問題であり、それを臨床哲学として考えることには欺瞞のようなものを感じざるをえなかった。……たしかにとりあえず行ってみないとわからないということも正しいようにも思われるが、その反面、哲学的な興味からその場に行くというのは、私にとっては、哲学的な興味からさまざまな哲学のテクストを読むという従来の哲学研究と大差ないように思われた（一五一頁）。

ある問題があり、それに直接かかわるのではなく、むしろそれにかかわる人にかかわるというあり方であり、それが臨床的だということになる。……しかしこれは最初の問題を一階、あるいはある種の特権的なものだとみなしたときに生じる事柄であって、「私たちにとって」そのようなかかわり方しかできないとするなら、メタ的に見えるかかわり方は、「私たちにとって」はメタ的なかかわりではなく、むしろ一階のかかわり方だともいえる（一九八頁）。

ここには、何者として現場に立つのか、という当事者性に関する問題提起が看て取れる。残念ながら、この難題を深く掘り下げることはここではできないので、別の切り口でこれに関連する事柄に言及しておきたい。

近年、英米圏を中心に「実験哲学」というムーブメントが注目を集めている。実験哲学は、既存の哲学的な議論が多くを負っている哲学者の直観を現代の自然科学や社会科学の知見に照

らして吟味することで、より適切な議論を組み立て直そうとする取り組みである。評者は、この実験哲学の試みと、臨床哲学の試みとがよく似た方向性を有していると考えている。哲学的な議論を狭い哲学者のサークル内で自足して遂行するのではなく、哲学それ自体が扱おうとしてきた事柄に、より適切な仕方で迫るために、哲学の外部にある別の参照項を求めて動き出す、という点において、両者は類似しているように思われる。ただし、その参照項が、実験哲学では自然科学や社会科学の成果であり、臨床哲学では街中や臨床での対話活動であり、前者がより合理的な方向へと動いているのに対して、後者は理性的思考だけでは捉え切れないものへと動いている、という点では大きく異なっている。一見すると、両者は大きく異なる営みであるように思われるのだが、外部へと参照項を求めることで、問題を前に自分自身が何者として立つのか、という厄介な問題を抱え込むことになる点では、またしてもよく似ている。その際に、どこまで「哲学」として踏みとどまれるのか、あるいは、踏みとどまらず未だ名前のない新しい営みとするのか。（4）の冒頭に関連するが、臨床哲学は哲学でなければならないのか、という問いが、その背後に潜んでいるように思われる。

（6）研究・教育方法論について

本書を通じて、臨床哲学の独自性は、文献研究とフィールドに継続的にかかわる実践との同時並行的遂行という研究・教育方法論にあることがわかる。たとえば、哲学カフェについて本間は次のように述べている。

> もちろん、哲学カフェにおける議論が十分に哲学的であるためには、哲学思想を学ぶことによって身につけられるであろう粘り強い思考力や問いを彫琢する能力を進行役が有していることは不可欠である。しかし、その実践の力は哲学に関する知識をただ読み書きするだけでは体得されない。十分とはいえない知識運用はかえって議論を分かりにくくさせるだけだろう。進行役を演じるには、一度習得された知識をすべて忘却し、その場で出された意見から、具体性を失わないまま議論を構築できる「ボトムアップ」な思考構成力が要請される。実践力を培うためには現場が不可欠である。「進行役の養成」は授業などの狭義の教育の場では不十分であり、ひたすら実践の場数を踏むこと以外には近道はないように思われる。だから、臨床哲学研究室とCafé Philo の両方が必要なのだ（一二八頁）。

哲学カフェのような特殊な実践については場数を踏むことが重要なのは言うまでもない。しかし重要なことは、さまざまな外に出る試みによって培われたものが、個々の人々の哲学にどのようにフィードバックされているのか、である。まだ何者でもない大学院生たちが、まずもって外でいろいろと経験し考えることから始めたがゆえに、そうでない引きこもり読書系大学

院生たちよりも、優れた哲学者となりうるのはどのような点においてか。単に取り組む哲学的問題を自分自身の切実な関心に結びつけられるということだけであれば、社会人経験者から哲学研究に移行する人材のリクルートをすれば事足りるだろう。

もう一点、気になるのは、軸足の問題である。臨床哲学に取り組む人々は、文献研究と実践の双方にきっちりと重心を置くことができているのだろうか。実践の方に偏っていて、文献研究が疎かになっているということはないのか。文献研究は、一人で読書をしているだけでも不十分であり、特定の研究室内で読書会をするだけでも不十分であり、より広い学術的なコミュニティのなかで、専門用語を駆使した緊張感ある議論を通じて、十分なものとなる類いのものではないのか。そうしたある意味では狭い議論の中でこそ見えてくるものと、より社会に開けた問題群を論じるための語りとの間にある裂け目を知ることこそが、哲学として実践にかかわることに不可欠だと評者は考えている。重心がどちらかに偏っていては、その裂け目は、大きすぎて裂け目として自覚されないだろう。伝統的なスタイルの倫理学研究と応用倫理学研究の間ですら、その裂け目はともすれば自覚されにくいのだから、文献研究とフィールドでの実践との間では、よほどのセンスがなければ、その裂け目を適切に自覚することはできないと思われる。

(7)　本書の編集方針について

本書ではしきりに、大学院生たちが豊かな部分を担ってきたと語られている。にもかかわらず、居並ぶ執筆陣は、指導教員に相当する人物ばかりである。これは、臨床哲学の試みの真髄を伝える上で果たして適切であったのだろうか。むしろ、大学院生たちが臨床哲学の取り組みをどのように受け止め歩んできたかを彼ら自身の言葉で語らせる必要があったのではないか。これまで、そして現在、臨床哲学の運動にかかわりをもつ人々が、本書の企画段階でどの程度参与していたのか。本書で語られている内容から察するに、それこそが本当は重要であったのではないかと感じる。本書の編集体制自体が、(少なくとも対外的には)「鷲田、中岡、そして本間の名人芸としての臨床哲学」という印象を温存させることになってしまう恐れもある。やや厳しい言い方をすれば、「外へ」ということがしきりに語られながら、結局は、内なる多様性を楽しむ中核メンバーが感想を述べ合っているにすぎないようにも見える。臨床哲学が多様であるのならば、当の多様性を生み出した本人たちに語らせることで、その多様性をもっとうまく読者に伝えられたはずである。制度的な指導者の語りを中心にするのではなく、実地で、最も内在的な視点から臨床哲学を見つめている者たち(実際に中心的に取り組んだ大学院生や、臨床哲学の外部のクライアントたち)の語りを優先するべきであったのではないか、ということである。グッドプラクティスの出典元を提示し、それを紹介し論評

する手つきは、臨床哲学の創設者が批判して来た従来型の伝統的哲学研究の手つきそのものにも見える。臨床哲学にかかわる大学院生やクライアントたちが万が一にもそれで満足しているとすれば、臨床哲学が立ち上がったその時に逃れようとしていた当のものを、皮肉にも、別の形で再生産してしまっていることになろう。本書以降、臨床哲学のシリーズが刊行されるようなので、臨床哲学の「当事者」たちの手による著作を期待したい。

以上、御託を並べては来たが、本書は本来、このような長い書評を受けるべきではなく、ただ読まれるべきものだと思う。そして、いかなる批評も、臨床哲学教室が十余年の歳月を費やして蓄積してきたものを揺るがすことはできないだろう。その蓄積が、大阪での地産地消に終始しないよう、臨床哲学の外へ向けてさらに発信されていくことを願う。そして、関西倫理学会においても、もっと臨床哲学の顔を見せてくれてよいのではないか。評者は会員の一人として、そのように期待している。

（おくだ　たろう・南山大学）